

国立民族学博物館の収蔵品④3

# オラン・アスリの彫像



精霊像、モヤン・プティン・プリオン

多民族国家マレーシアには、オラン・アスリという先住民が暮らしている。オラン・アスリは一八のグループに分かれているが、今回紹介する精霊の彫像を制作しているのは、その一八グループの中の一つで、クアラ・ルンプールの近郊に暮らすマー・ムリ (Mah Meri) の人びとである。二〇〇三年以来、私は、村をあげて彫像制作に取り組むブンブン村をたびたび訪れている。

村では男性の多くが彫像を制作し、女性たちはパンダヌスやニッパヤシの葉などで籠や小物入れを作っている。それらの工芸品はNGOを主宰するマレー人女性が引き取って、クアラ・ルンプールなどで開かれるイベントで販売している。女性はもともと、この村の人たちの生活面の援助や村の伝統文化の継承に役立ちたいという思いから活動をはじめたという。こうした活動の甲斐もあって、彼らの優れた彫刻技術は世界的に知られるところとなり、村の豊饒の男性が制作した作

品にユネスコから賞も与えられている。

ブンブン村の人びとは、「人は亡くなると『果実の島』と呼ばれる天国のような場所で暮らすようになり、精霊となって現世に生きる子孫の人びとを見守っている」と信じており、その精霊をモヤンと呼び信仰している。モヤンとは厳密には「祖先」を意味する言葉で、精霊はひとつひとつ名前がつけられ、それぞれが違った役割を担っている。華人の旧正月から一カ月後に設定される「モヤンの日」、村びとは祖先たちの霊を祀る儀礼を行なう。儀礼のクライマックスでは、民族楽器の演奏が鳴り響くなか、伝統的な歌とともにモヤンの仮面をかぶった男性が現れ、女性たちが輪になって踊り始める。近年では観光客を招いて行なわれているが、精霊の仮面や彫像はもともこうした儀礼のために使用されていたものである。

写真の彫像は、国立民族学博物館で展示されている精霊像、モヤン・プティン・プリオン (Moyang Puting Belling) である。くるくると巻いた身体

の形からわかるように、これは「つむじ風の精霊」である。村びとにとってこの精霊は、めぐみの雨をもたらす風を引き起こす慈悲深い精霊であると同時に、タブーをおかした場合には、罰のため暴風雨をもたらす破壊的な精霊でもある。

彫像は、マングローブ林に生育する木々を材料としているが、アブラヤシのプラントリーションの拡大やゴルフ場開発のため、マングローブ林は年々減少しており、彫像の材料を得るのが難しくなっている。そのため、彫像の大きさも次第に小さくなりつつある。この精霊像も、実は、高さが一〇cm程度のとても小さなものなのである。

(信田敏宏)